
友人のPCデータを消したらなんか凄いことになった

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友人のPCデータを消したらなんか凄いことになった

【Nコード】

N5224V

【作者名】

tomato

【あらすじ】

友人が死んだので遺言通りPCのデータを消すはずだったが、なんかとりあえずすごいことになった、仕方がないので自分は生き残るために頑張りますよ。この小説には性転換ものが含まれていません、それが嫌な人はクリック非推奨。

二次創作の二次創作（前書き）

駄文ですいません。

二次創作の二次創作

「はあ、なんで俺がこんなこと」

俺は今友人の部屋にいて部屋の中を散策している。

そこに散らばっている友人の私物。

「馬鹿野郎が悲しくなっちまうだろうが」

なぜ俺が友人の部屋を散策せねばならんのだ。

「何で死んじまったんだよ、あの阿呆が」

愚痴を言わねば涙が出そうだったのだ、あいつは俺の目の前でトラツクに轢かれそうになっていた幼女をかばって死んだ、本当にアホだ。

「なんで最後の言葉がPCのデータ消しといてなんだよ、もっと他に言うことあるだろうが」

あきれて涙も出ない、おっとこれか？

「あいつパスワードぐらいかけろよ……」

立ち上げるとパスワードの確認もなしに直ぐに立ち上がる。

「こいつのデータを消せばいいんだよな？」

しかし勝手に死んでしまったあいつに少なからず腹を立てていた俺はあいつの消してほしかったデータを見せてもらうことにした。

「エロゲー……ゲーム、RPGツールもあるな　　うわぁ」

あいつ、小説なんか書いてたのか……しかも題名があいつが俺に進めてきた小説なんだけど……これは見なければよかった。

データを消せと言われたが残念なことにやり方を知らない俺は仕方なく一つ一つゴミ箱で消去することにした。

「ふう……これで最後っ」と

何ということでしょう、背景は女の子から自然の風景に、デスクトップにはゴミ箱と電子メールとインターネットのアイコンしかありません、履歴はもちろん何も無い。

「これであいつも浮かばれるだろう……たぶん」

400GBいっぱいエロゲーとアニメと自作小説が入ってたら親は引くよな、うん。

ボタン、と黒く光沢するパソコンを閉じ、立ち上がる。

一度部屋を見回して……

「消した意味あるのか？」

エロゲーのポスターがでかでかと張られた部屋を後にする

「あ、忘れ物した」

消せない時の為にバグを入れたUSBを部屋に忘れてきてしまった
ようだ、戻らねば。

いったん出た部屋に華麗にターンして戻る、するとさっきは閉じて
いたはずの黒いパソコンが開いていた。

「あれ？」

疑問に思っている間に、ブウウンという起動音とともにパソコンの
画面が強い光を発し始める。

「え、ちょ！？」

光の本流は俺をパソコンの画面へと押し流そうとする、あまりの光
景に呆けてしまって力が入らない俺はそのままパソコンの画面に引
きずり込まれてしまった。

「おれぞあおれぞあ」

なんですと？

俺は気が付いたら赤ん坊になっていた、あまりに突然すぎて突っ込みもできそうにない。

困惑しているといきなり厳つい顔が目の前に現れて喋りだした。

「お前の名はイリス、イリス・イスフィリア、王国の第一皇女だお前の人生に幸多からんことを願おう」

「えうー」

「そうかそうか」

いや何も言っていないんですけど。

というより皇女ってことは俺女ですか？

「とうか、よくよく考えてみればこの世界あいつの書いた小説の中じゃね？」

自分の広すぎる自室に置いてある机に肘をついて考え込む。

あ、今五歳です、時は吹き飛びましたがそれがなにか？

魔法があるとしても世界設定に思わず苦笑してしまったが、この世界をあいつ、あのアホな友人の書いた小説とわかるにはかなり時間がかかった。

まず第一に今の自分の名前イリス・イスフィリア、あいつの小説の中だったら嫉妬に狂って魔王と契約した悪い皇女なんだ、これが。

そして第二に五歳離れた妹の存在、彼女は光の巫女という存在で、生まれた当時から全ての存在に愛され、魔力チートのテンプレ的存在、つーか笑ってるお父様なんて初めて見たわ。

そして最後に妹を生んで死んでしまった母親、まあこのぐらいしか判断材料がないから、どうともいえないけど。

「しかし精霊に嫌われる体質だったっけ？自分」

確かそんな設定だった気がする、小説は進められて仕方がなく一度だけ読んだだけなのであまり覚えていない、覚えているのはこのままだと自分は不憫な結果にしかならないということだ。

「まあ自分に限ってそんな失敗はしないと信じたい」

この国はぐらついた棒の上に成り立っているといっても過言ではない、表向きは平和なこの国は裏では腐った貴族や商人がこの国を虫食いだらけにしている。

まあそこらへんは妹が10歳になれば何とかしてくれるから気にしない方針で、今の俺が目指すのはいかに楽しんで過ごせるだから、どうでもいいわ。

妹が生まれてから父はそちらにかかりつきり、貢物はぱったりと止んで妹へ、教育係も今では週一だ、正直自分の時間が増えるのは嬉しいことだ、妹には精々頑張ってもらうことにしよう。

才能がないとかマジ勘弁（前書き）

主人公は性別に魂を引っ張られました。

才能がないとかマジ勘弁

「なんとということでしょう」

内政をしたいと思っても自分がそんなこと口をはさめるわけがない、勉強も魔法至上主義のこの世界じゃ、魔法の勉強が一番重要でいくらか他教科ができて褒められないし、むしろ貶される、そりゃこのお姫様も魔王と契約するわ。

「魔法云々がまったくできない、精霊が近寄ってこない、魔力が無いこれ何て虐め？」

世間での私の評価など

「え？王国の第一皇女？アイリ様じゃないの？」

アイリとは私の妹の名前だ、つまり第二皇女である。

やら

「イリス様ねえ、魔法を使えない出来損ないなんでしょ？それにあまり容姿も良くないそうですし」

余計な御世話だ、それにアイリ基準に考えたらこの世のすべてが霞んで見えるわ。

つまり何がいいかというのと、アイリ超うぜえー、嫌味を言われる自分の立場になってほしいぜ。

只今5歳の私の妹はもうなんていうか、チート？何それ怖い、な感じ、魔法とか一人で魔王殺せるだろうってレベルだし現代人の脳みそをもつてしてもギリギリ得意な数学で勝てるって程度、言語？5カ国語喋れるよ？でもこの世界には魔法って便利なものがあったですな（ry

これが格の差か、すべてに愛されるあの子と平凡な自分との。

「泣けてくるわ……」

金髪で淡いワインレッドの瞳とかどこぞの中二病の容姿だよ、自分なんて真っ黒だよ目も髪も。

今日は最近見つけた城の図書館の死角で本を読んで暇をつぶす、字も必死に勉強して覚えたが、この世には魔法（ry

従者など付けてもらえるわけもなく、いや忘れられてるのか？まあそちらのほうが楽だ。嫌がらせは心労に来る。

「……………」

ペラッペラッ

この時だけが最近の自分の至福の時だ、妹は自分の居場所をどんどん減らす、何故こんな思いをしなくてはならないのか？

答えは簡単私が能無しだから。

何をしても妹にはかなわない、だから……

「……………ん？」

視線を感じて顔を上げる、そこにいるのは先ほど話に出ていた五歳の妹アイリ、珍しく従者も護衛もない。

「お姉ちゃん！」

私が顔を向けた瞬間走って私にダイブしてくる我が妹。

「いっふっ」

運動能力が皆無の自分では妹を避けることなどできず仕方がなく腹で受け止めた。

「にゅふふふ」

「ちよつと、アイリ、やめなさいよ」

変な笑い声で私の腹に顔を押し付けてくる妹はさらに顔を押し付ける。

「……………ふう、また何かあったの？」

こうやって無邪気に行っている時限って妹は心で泣いている、まあその悩みも私にとっては妬ましいわけですが。

「……………うん」

「あっそ」

どうでもいいので放つといて本を読むことにする、私の膝を枕に憎たらしい後頭部を見せる妹、ああぶち殺してえ。

でも殺せない、むしろ無理、物理的な意味でな。

ペラッペラッ

「どうしてお姉ちゃんは……」

「なに?」

「どうしてお姉ちゃんは平気なの?」

「……」

多分この子の言っていることは自分の従姉妹たちのことだろう、あいつらも命知らずだな……

「アイリ私は」

「じゃない、化け物じゃない!私は化け物じゃないのに!」

めんどくさい奴、お前の中二病に付き合ってられるかよ。

「……はあ」

この世界に来て自分はお人好しのようにだ、馬鹿な奴と自分で自分を罵りながら妹の頭に手を乗せる。

「アイリあなたは化け物じゃないわ、大丈夫、私が証明してあげる」
「でも」

顔を上げて涙を流す顔を見せるアイリ、あー、最っ高に、い・ら・
つ・く

「アイリは私の妹だもの、化け物じゃない、私が信じるんだから間違いないわ」

「……うんっ、うん！」

チートと化け物は別物ですよ、たぶん。

あの後泣き疲れて寝てしまった妹の顔を見ながら考える。

「虐めか……」

遠い過去のことのように思える、まだ自分が中学生だった頃が。

「そっいえばあの時あいつに会ったんだっけな……」

馬鹿でお人好しなあいつに。

「ちっ、お人好しが移っちゃまったよ、糞！」

あーむかつく！

王子さまもチートなのよねえ (前書き)

できれば主人公には幸せになってほしい、でもなんかNTR臭がするからどうしようか……悩む

王子さまもチートなのよねえ

今日も今日とて最低限の衣食住を確保しながら生活するイリスです。

「今日は騒がしいな……」

何時もは三人一組で仕事をしながら喋っているメイドたちが今日は仕事もしないでお喋りをしている、警備の騎士たちもなんだか多めだ。

「お姉さま!」

向こうから笑顔で妹が後ろに二人も騎士を引き連れて向かってくる。

「アイリ?今日はいつにもましてふわふわしてるわね?」

頭も洋服もな!

「そうですねか?だって今日は帝国の第一王子がこの国にいらっしやるのですよ?」

へーそうなんだー……

「え?そうなの?」

初めて知っただけだ。

「やっぱり何も知らされていなかったんですね?」

「いや、だって」

友達っていうのははじめの一步が大切だよな？うん。

友達のない私にはそんなこと知ることできませんよ、すいませんでした。

「だってもなにもありません！だいたいお姉さまはいつもいつも服装に関して興味がなさすぎですよ！」

服は勝手にメイドが用意するけどあんなドレスやら豪華な服いつも着ていたら肩が凝るだろ？

だから私はこの目立たない程度のゴスロリでいいんだよ、これが一番まじだった。

「いいのよ私は空気で、めんどくさいことは好きじゃないの」

「むー、もしかして今日のパーティもサボるきですか？」

上目遣いで柔らかかそうな頬を膨らませて私を見つめるアイリにどす黒い心を見透かされるんじゃないのかと気が気でない。

「ええ、めんどくさいものそれに」

その王子様もあなた目当てで来るに違いないしね。

そのあと妹のお願い（という名の命令）により仕方がなくパーティーに出席することにした、といっても形だけで始まったらすぐに抜け出す算段だけだな。

「あー暑苦しい」

体中に塗られたパウダーっぽい何か汗でべったりと張り付く。腕を見ると貧弱な白もやしな腕がパウダーでさらに強調され

「大理石と間違えられそうだな……」

なんかもう病人だよこれ。

「まだ来ないの？ さっさと風呂入りたいわー」

王子が現れるであろう門を眺めながらこないだのことを考える。前回妹に泣きつかれた後いろいろ試した結果虐めが全て私に向かいましたよ……アハハ

どうやら彼女たちの虐めは嫉妬から来るものだったようです、幼少期にはよくあるよね、友達になりたいけどなれないから虐めようって感じのこと……

「……さま、お姉さまー！」

ん？外野がうるさい？

「……………何？」

横を向くと頬をほんのりピンク色にしたアイリが私を揺すっている。

「ボーっとしすぎですわ、もうすぐヨハン様が来ますのに！」

ヨハンというのはさつき話題に出た帝国の第一王子の名前、年は私の5歳上で15歳、かなりの美形で魔法もすぐくて男版アイリである、チートタヒね。

彼と初めてであつたのは私が4歳で彼が9歳の時だ、あの時から6年もたったのか。

「はいはい、そうね、そうですねー」

「なんですかその言い方はっ」

「あーはいはい」

「はいは三回ですわー！」

「はいはいはい……………って何言わすのよ？」

「こないだの仕返しですドヤマァッ」

こないだっていつのことだよ？

「喰らえデコピン」

ぺチッ、とりあえずむかついたのでデコピンをしておく。

「あつっ、ひどいです……」

そうやってくだらない喧嘩をしていると噂の王子様とやらが来たそう
うだ。

「へえ……」

「まあ……」

門を開けて入ってきたのは記憶にあつた綺麗な金髪と氷のような青
い瞳の女の子に別の意味でもてそうな顔をした弱気な少年ではなく
多少精悍になっていた男の子だった。

「あの糞ガキが立派になったもんだ」

帝国の第一王子、か。

「っ！」

イケメン死ねとか思いながら彼を眺めていると突然こちらを振り向
いた彼は私の顔を一度眺めた後また別の方向を見始めた。

「ヨハン様お姉さまのことを見てましたね？」

「あ……うん、きつとアイリのことを見たのよ、そうに違いないわ」

「そうですね？」

なんだその眼は抉るわよ？

暗いな、圧倒的に暗いぞ！（前書き）

昔は女の人には選択権がなかったそうですが、ひどい話ですよ、今はだいぶましになりましたがそれでもまだまだ……といったところ
です、みんな性別：秀吉になればいいのに。

暗いな、圧倒的に暗いぞ！

「むう……」

姉さんはいつの間にか消えてしまいました。

「はあ」

姉さんのさっきの物憂げな横顔素敵でした……ヨハン様とはどういった関係なんでしょうか、気になりますわ。

「お姉さま……」

あゝかわいい、無表情な顔が無理して微笑もうとしているのを眺めるのは最高ですわ。

最近では添い寝もしてくれるお姉さま、御淑やかにご成長なされたお胸は10歳にしてすでに母を感じさせるに十分な柔らかさですわ。

ウエヒヒ、おっと心の中だからと言って変な笑い方は禁止ですわ。

「こんばんわ、アイリ様」

「久方ぶりですわ」

お姉さまの所に行きたいのにこの有象無象どもが邪魔ですわ、はあ、いつになつたお姉さまの所に行けるのかしら。

一目散にパーティー会場を抜け出した私は誰も使っていない来客用の応接間のソファーに寝転がる、ここでパーティーが終わるまでサボるのだ。

「ふう、疲れた……」

今日の服装は走りにくかったので仕方がなく早走りで動かないといけなかった。足が痛い。

「くう、情けない」

長すぎるスカート部分を捲りあげて少し固くなっている足を揉む。

「白い、白いぞ！ 圧倒的なまでに！」

モミモミ

「もみじもみじもみ」

モミモミ

「ひゃっはーもやしは死ねえ！」

ごめん、自分で言っただけで悲しくなった。

「……………」

もはや言っこともなく無言で足をさすったり揉んだりする。

「むう……………」

ふにゃっふにゃっやぞ〜！ふにゃっふにゃ！

足を伸ばして汗ばんだ太ももを外気にさらそうとして

ガタンッ

「だれだっ！？」

目の前のショーケースが動いた、え、なにそれ怖いんだけど。

「ニャー」

「何だネコか……………」

「……………」

沈黙が部屋を支配する……………

「だれかあああ！くせm」

「ま、まで！俺だ！ヨハンだ！」

「へ、変態iiiiiiii！へんてもがつ！」

叫んだらいきなり口を押えられた。

「だ、誰が変態だ！少し黙れっ」

「もがもがつ！」

体全体で拒否していたはずみでと自分は変態とともにソファに座ってしまった、もちろん自分は変態の膝と膝の間にすっぽりとはまっている。

「イリス……俺だヨハンだ、手を離しても騒ぐなよ？」

コクコクとうなづく自分に満足したようで、手を離す。

「なんであんなところにいたのよ！」

「お前がいきなり入ってくるからだろ！？」

「責任転嫁よ！ならなんで隠れたのよ！」

「うっ」

「それにさっきまで私のこと覗いてたんでしょ！この変態！ロリ」

ン！死ね！」

「おいこら！他国の王子に向かって死ねとは何だ！死ねとは！」

「うつつ、こんな変態にあんなシーンを見られたなんて死にたい、もうお嫁にいけない」

お嫁になんか行きたくないけどな。

「よ、嫁なら……」

「ん？なんか言った？」

「べつになんでもねーし」

「あっそ、っていつかさっさと離しなさいよ！」

いつまで手を腹に回してんだ！このロリコンが！

「す、すまん……」

「まったく、そもそもどうしてパーティーの主席がこんなところにいるの？」

しかも明かりも付けず……

「はっ、もしや閨の相手を待っていたとか！？」

「どづしてそうなるんだ！？」

まあそんなわけないよね。

「冗談ですよ、からかっただけです」

「どうしておまえは、……くそっ」

頭を抱えてソファに座り込む王子、馬鹿ですね、魔王に殺されて死ねばいいのに。

あー、そういえばこいつ勇者メンバーの一人でしたね、魔王ガチで泣くんじゃない？

「で、ヨハン様はどうしてこんなところに？」

「お前を探しに来たんだよ」

「ふーん」

妹か誰かに頼まれたの？余計なお世話ね。

「何だよその眼は、ちょっと驚かせてやろうと思ったたらお前がいきなりあんなことを……」

「別に私の足を見たところで何も感じないでしょこんな不細工な足
白く弱弱しい足、すぐに折れてしまいそうなこの足は多分見た目通り力を入れれば折れてしまうだろう。」

「お前は……どうしてっ」

「きゃわっ!?!」

手を引っ張られてソファに押し倒される。

薄暗い中ヨハンの氷のように透き通った青い瞳が黒く、どこまでも暗い私を映す。

「やめてよ……」

「どうしてだ……俺はお前のことが」

綺麗な顔を歪ませ言葉を紡ぐ。

「やめる!」

やめてくれ、俺は、俺はそんな言葉聞きたくない。

「どうして俺を拒絶するんだ、なんで!」

「……なんでか?そんなの決まってるだろお前がアイリの婚約者だからだ!」

これはアイリが生まれた時に決まったことだ、当然だ、全てをもつて生まれたアイリと何も持たずに生まれた私、これは当然なんだ。

憎い、自分が、罪悪感と嫌悪感が自分を攻め立てる、未来を知っている俺は知りながら何もしない。

死ぬことに安息を求めるとしたら、それまでの道のりは長く険しい、故に私は地獄に生きている。

誰か助けてくれ、人として生きるのにはもう辛すぎる。俺に力があれば、もっと力があれば悩むことなんて必要なかったのに。

王子頑張れ超頑張れ

彼女に出会ったのは俺がまだ齡9になる誕生日の祝いにこの国にや
ってきたのがきっかけだった。

9歳にして国で最も強大な魔力を持て余した俺はこの年にしては大
人びた感性を持っていたと思う。

媚び諂うもの、香水臭い女、そのどれもが俺を不快にするには足り
るものだった。

「ふん、魔法か」

俺の魔力は他の人間より多かった、だがそれだけだ、それだけで俺
は多くの人間に疎まれ媚びられうんざりだ。

本当はこの誕生日会も父王がこの国との和平の証として俺一人をこ
こにやっただに過ぎない。

しかもこの国の第一王女は魔力無しの出来損ないらしいしそんな奴
とは会いたくもなかった。

「王子」

「王子」

「王子」

王子王子王子、五月蠅い、どいつもこいつも私利私欲の為に近づいてくる奴らばかりだ、それは正しいか正しくないのかであるなら正しいのだろう、だが俺には耐えられない。

鳥籠の中など死んでもごめんだ。

「こんばんわヨハン様」

ダンスホールから抜け出しテラスで考え事をしていたら突然話しかけられた、確か彼女は

「イリス姫」

黒き髪に見ていると吸い込まれそうな黒き瞳、黒と言うのはあまりいいものとはされていないが彼女の黒は月に仄かに照らされどこか神秘的だった。

この国の第一王女で魔法が使えない皇族にあるまじき少女、俺の周りの者が彼女を中傷していたからよく知っている、と言ってもどうせ噂だろう、魔法が使えないなど俺にとってはありえないことだった。

「今日はあなたの誕生日会なのに浮かない表情ですな？」

まあ皇族同士の会話と言えどもまだたった9歳と4歳の拙い会話なのでこんなものだろうと思っていたが、4歳という年の割に大人びた表情の彼女、そこで俺は気づいた。

「イリス姫、翻訳魔法をかけていないのですか？」

疑問、当然だ、この国と帝国では話す言語が違う、それゆえに翻訳魔法がこういった場には必須なのだ。

「お恥ずかしい話ですが私は魔法がほとんど使えません、なので貴方の国の言語を習得しました」

事も無げに言う少女、9歳の俺でもその才能に驚く、それ以上に驚くこともあった。

「魔法が使えない？」

では貴方が父親にすら侮蔑されているとは本当のことなのか？噂も全て？

「はい」

「大変じゃないのか？」

誰も助けってくれずあるのは第一王女と言う地位だけ、それすらもこれから生まれる御子に奪われそうというのは本当のことなのか？

「はい」

「どうして？」

「魔法が全てなわけじゃありませんから、翻訳魔法がなくとも意志は疎通できる、火がほしかったら焚けばいい、水が欲しかったら汲めばいい、そう思いませんか？」

それは簡単に見えて難しいことだ、でも確かに、確かにそれは…

「それは、それは考えたことなかったな…」

バカバカしくなった、眼前の少女にとって地位も魔法もあってもなくても同じなのだ、魔法を疎ましく思っていた自分が馬鹿らしくなった。

「どうかしましたか？」

心配そうにこちらを見つめる少女に俺はつい言ってしまった。

「結婚してくれ」

「……ロリコン？」

その後色々あったが俺はイリス・イスフィリアを愛している、絶対だれにも渡さない。

「イリス…」

ソファの上で黒い髪が広がる。

「やめてよお……」

6年前の彼女とは思えない弱弱しい姿、どうして、誰がこんな風に彼女を？

「違う、こんなの違う」

「……」

全てを諦めた瞳、弱弱しく張り付いた偽の微笑、すべてが違う。

「あの頃の君はどこに行ってしまったんだ？あの時のイリスは……」

「……」

頭のいい彼女はすぐにそれを分って気まずそうに眼をこちらに向けない、目を合わせようとしない彼女にイラつき乱暴に顔をこちらに振り向かせる、目に涙を浮かべながら彼女はこう言った。

「あんなの、妄想だったよ、魔法はやっぱり、すごいや、勝てないよあんなの、無理だよ、どう頑張ってもアイリに勝てない、これじゃああなたにも見捨てられる……いやだ、見捨てられたくないよお」

ついに彼女は泣きだし嗚咽が部屋に満ちる、俺は 俺は許せなかった、自分が認めたくなかった彼女が変わってしまったことが、だから俺は。

「そうか……」

なぜあんなことをしてしまったのだろうか、慰めてやるべきだったのに、俺はどうして

俺はソファから立ち上がり部屋から出た、まだ彼女の嗚咽は上がっていたが衝動のままに外に出た、そして暗い部屋に彼女を一人残した。

王子頑張れ超頑張れ(後書き)

本当は王子が好きでしたよ回

勇者かと思っただか？残念！魔王ちゃんでしたー！

パタン…ドアが閉まりヨハンが去ってしまった。

「は、はは…私は、本当に…馬鹿だな、馬鹿だ…」

唾を飲み込む、塩辛い、どうしてだろうなあ、欲しいと思ったものを自分から捨てるなんて、あのまま悲劇のヒロインを演じてれば、ヨハンの友達の振りをしていれば、少なくとも見捨てられることなくてなかったのになあ。

誰かの温かみが欲しいと思うのは何年振りだろう、妹の優しい心が辛かった、悔しかった、ただひたすら耐えてきたのだ、だが自己満足に過ぎなかった、前の私は他人を偏見で見ると馬鹿にもするただの自己中の馬鹿でしかなかった。

だからこの生では他人の為になることをしようと思っただがそれも無理だった、腐った性根はどこまで行っても腐った性根でしかない。まがい物の私では自己陶醉と言う形でしか自分を嘆けないカスつぶりに腹が立つというより虚しくなってきた。

「何に悲しめばいいのかもよく分かんなくなってきたよ」

腹を渦巻くものが何かわからない、何もわからない故に何もできない。

「あははは、馬鹿だなあやっぱり」

頭がボーっとする、何も考えたくない。

「ああ、力が欲しい」

何気なくつぶやいた一言、その一言は誰に届くこともなく消えてゆくかと思った。

「じゃあ僕と契約しようよイリス・イスフィリア、君の望む力を上げるよ」

懐かしい声がある、昔死んでいなくなってしまった馬鹿の声だ、ああ、懐かしい、そうだなあいつが俺に力をくれるというのなら

「力が、欲しい」

「承諾したよ、じゃあ行こうか」

どこへ？問う間もなく抱きかかえられる、ああ、どうせ夢だ都合のいい妄想だ、きつと彼は魔王でもないし俺の友人でもないうえに存在してないんだ。

薄れゆく意識の中誰かが叫んでいるのが聞こえたがこの暖かい何かにもう少し埋もれたくてそのまま寝てしまった。

ああ、こんなところで寝たらまた誰かに馬鹿にされてしまうな。

「……ど……？」

目が覚めたら辺りは真っ暗でした、しかし体が触れている感覚からいうとベッドのようですね。

「明かり……」

一回寝てすっきりしたからか頭が軽い、やっぱり重苦しいのはダメだな、酒も駄目だ、もうやめよう。

あー恥ずかしい、昨夜の私はどうにかしていたのだ、ヨハンにあら謝ろう。

と言っより暗いな……

「はい明かり」

部屋が明るくなり目の前に端正な顔の人間が現れた、こんな人従者にいたかな、そもそも私に構う人間などこの城にいたかどうか……。

「いやー魔王と契約なんてしてもらえるかわからなかったけどやってみるもんだね？」

「あ、ありがとう…え？」

なんですと？

「初めまして？魔王です」

「なんですと？」

また面倒くさいことになった…。

魔王は滅びぬ何度でも蘇るう

目覚めたら魔王が目の前に居た、いや何を言ってるのか分からないけど、分からないけど目の前にいるんだ。

「えーと、魔王でしたっけ？」

「くすくす、リアンはかわいいなあ」

白い髪に紅の瞳、中二病ですね分かります。

「あの、魔王さん？」

頭を優しくなでてくる魔王、気持ち良いのですが、なんとなくか、いらつくぜえ。

「何の用か知りませんが城に帰してくれませんか？」

「あんな牢獄に帰って何をするの？」

不思議そうに聞いてくる彼、確かにそうなのですが、ここにいるよりはましだと思いますよ？

「自分の家に帰るのは当然でしょう、だから帰るんです」

「馬鹿な子、あんな場所に帰っても何も無いのに」

ベットから起き上がろうとした頭を手で押されてベットに戻される。

「そうですね……でも妹がいますのでそれが理由ではだめですか？」

あそこにいれば将来妹の保護は受けられそうですからね、ここよりはましなはずですよ。

「駄目だ、君は僕と契約した、もう君は僕の物だ、誰にも渡さない絶対に」

これだから、これだからこいつら主人公枠の奴らは！

「どうしてあなたたちはそんなに自己中なんだ！ふざけるなよ！」

周りに誰もいないからだろうか、それとも魔王という絶対的上位者の目の前にいるからだろうか、本心がそのまま口に出る。

「自己中、自己中か……そうだね、その通りだ何故なら僕は魔王だからね、そう在らなくてはならない」

面白可笑しい赤い目が少しだけ悲しそうに歪んだ……………こいつら主人公枠ってーのはどーしてこう……

「リアン？」

顔を突然手の平で被ったのが不審だったのか困惑した表情を浮かべる魔王。

「…………やる」

「何？」

「契約だかなんだか知らないけどそんな顔されたら心配だからほっとく訳にはいかないでしょうが！少しの間だけ一緒にいてやるっていたのよ！」

「・・・ぷっ、あはははは！なにそれ！あははは！」

いきなり笑い出す魔王、ムカつくけど少しだけ安心した。

「ぬあ！？なんで笑うのよ！」

「いやあなんか無性に笑いたくなってね、そうか心配か、心配ねえ、あはは！」

「むきー！」

顔が熱い、ムカつくぜえ。

「あはは！」

「うがああああー！」

「お姉さま・・・」

あの誕生日会の後消えてしまったお姉さま、誰も何も知らない・・・

それどころか誰もお姉さまを探そうとしない・・・

許せない・・・笑ってそれを見ないふりをするお父様・・・

「お姉さま・・・」

私が唯一甘えられるお姉さま、お姉さまがすぐ傍にいない・・・何処に行ってしまったの？

「アイリ様」

「誰？」

自室で悲しんでいると一人の男性が訪ねてきた、彼は臣下の礼を取ると開口一番にこう言ってきた。

「私はアイリ様の味方です」

「どついでにとっ」

「あなた様の探しているイリス・イスフィリア様の行方を私は知っています」

「知っているの!？」

「ええ」

「今お姉さまはどこにいるの!？」

「皇女様は今魔王の元に・・・」

「魔王!？」

東の魔王と西の魔王、この世界には二人の血を分けた魔王が存在する。

その力はどの魔より強く、比類なき闇の力を持つという、人間たちの恐怖の象徴。

この世界は二つの王国と二人の魔王が互いに牽制し合い成り立っている。

「魔王とはどちらの魔王ですか？」

「西の魔王でございます」

「なんてこと」

最も残虐で最も恐られている魔王の元にお姉さまが・・・

「早く助け出さないと!」

「お待ちくださいアイリ様、今行っても殺されてしまいます」

「でもこうしている間にもお姉さまが！」

「皇帝陛下がお許しにならないでしょう」

「ではどうすればいいの！？」

皇女である身分も忘れ泣き叫ぶ、すると男はこういった。

「私にいい考えがあります」

「？」

「勇者を召喚するのです」

私は彼の考えに賛同した、そして彼を全面的に信用し、彼を大臣の地位に押し上げた。

あの時彼の嗤っている顔を見ていれば、いや見てもきつとバカな私は同じ間違いをしただろう。

「あの、ところであなたはどちらの魔王ですか？」

「どちらの、という表現はよくわからないけど君たちの言葉で言うなら僕は西の魔王だよ」

「え？」

「驚いた？」

「はい、本で読んでいたのとは全然違います、西の魔王は残虐で恐ろしいと・・・」

「だろうね」

寂しげな表情で肯定を示す彼、その表情が気になった。

「どうしてですか？」

「まあそれはおいおい説明しよう、まずは食事をしよう」

「は、はい」

ちょうどお腹が空いていたし魔王が何を食べるのか知りたくてつい返事をしてしまったが・・・

「いい加減手を離してくださいませんか？」

冒頭を読めばわかると思うが頭を手で抑えられていてあれからずっとそのままなんだ・・・貧弱で悪かったな

「ああごめんごめん」

「ちょっと！抱き上げないでください！？ちよ、やめ！」

貧弱な腕が恨めしい・・・

魔王は滅びぬ何度でも蘇るう（後書き）

魔王は二人いたのさ！

な、ナンダツテー！？

遅い更新申し訳ありません、テスト明けの清々しい気分って最高ですよね？

・・・はい、いいわけですよ・・・言い訳してすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5224v/>

友人のPCデータを消したらなんか凄いことになった

2011年12月11日23時46分発行